

学術雑誌・学術論文

研究成果は学術論文にまとめられ、学術論文は、学術雑誌に掲載されます。

電子ジャーナルが多いですが、冊子体もあります。



学術雑誌



学術論文

掲載雑誌の情報

掲載雑誌名, 発行年, 巻号, ページ数

教育心理学研究, 2017, 65, 361-374

青年期・成人期における共感性, 情動コンピテンスと道徳性の関連

溝川 藍*, 子安 増生**

論題, 著者

抄録 (Abstract)

論文の内容を簡潔にまとめた文章
研究の目的や手法, 結果までが集約されている

本研究では, 青年期と成人期において, 共感性の2側面(共感的関心・個人的苦痛)と情動コンピテンスの2側面(自己領域・情動の読み取り, 自己領域・情動の運用, 他者領域・情動の読み取り, 他者領域・情動の運用)がどのように個人の道徳性(社会的場面における道徳判断)と関連しているかについて検討した。参加者(352名)は, 青年期用多次元的共感性尺度, 情動コンピテンスプロフィール短縮版, 道徳推論課題を含む質問紙調査またはオンライン調査に回答した。結果から, 共感的関心は, 様々な社会的状況における他者志向的な道徳的判断につながる事が示された。また, 情動コンピテンス他者領域の中でも情動を読み取る側面と情動を運用する側面はそれぞれ異なる形で道徳推論に影響していることが示された。他者の情動を認識・理解し扱う能力は, ときに自己志向的な動機づけに結びつき得ることが示唆された。

キーワード: 共感性, 情動コンピテンス, 道徳性

本文

問題提起(研究目的), 研究手法と結果, 考察, 結論が述べられる

問題
道徳性と情動の関連については, 古代ギリシア及びローマ時代から長きにわたって論じられてきた。同情, 共感, 同感といった高次の情動は, 道徳的な行動を促し, 道徳性の発達においても(Hoffman, 2000; Walker & Pitts, 2002)重要な役割を果たしていると考えられている。また, 社会生活のさまざまな状況において, 道徳性・研究が促進される(Leeman, 1988; Matulis, Zentgraf, & Roberts, 2002; Mayer & Salovey, 1998; Salovey & Mayer, 1990)に資する。道徳性と情動の関連を検討した発達研究においては, 子どもを対象とした研究が多く積み重ねられてきたが, 青年期以降を対象とした研究は少ない。しかし, 個人の道徳判断や情動の調節には, 青年期以降も大きな個人差があり, 年齢によって変化することを示す知見もある。このため, 本研究では, 広く青年期から成人期を対象として, 両者の関連を検討する。

共感性の定義は研究者によって異なるものの, 青年期以降を対象とする共感性の研究では, 共感性の個人差を多次元的に捉える見方が主流である(Davis, 1983; 加藤・志木, 1988; 溝川, 2000)。例えば, IRI (Interpersonal Reactivity Index; Davis, 1980)や青年期用多次元的共感性尺度(溝川, 2000)においては, 共感性の下位次元として, 共感的関心, 個人的苦痛, 視点取得, ファンタジーの4次元が設定されている。そのうち共感的関心と個人的苦痛は, 共感性の感情的側面, 視点取得は共感性の認知的側面を構成していると考えられる(Davis, 2000)。本研究では, 共感性の2つの側面のうち, 感情的側面に焦点を当てる。共感的関心は, 「不運な他者への同情や関心」と定義され(Davis, 1983), 同情を思いやりの概念はここに含まれる(溝川, 2000)。他者志向的な援助行動や向社会的行動につながると考えられている。また個人的苦痛は, 「緊要する対人的状況での個人的な不安や動揺など自己志向の気持ち」と定義され(Davis, 1983), 苦痛を引き起こす対象からの回避を動機づけるものである。ただし, 個人的苦痛を引き起こす対象からの回避が楽しい状況では, 自己のネガティブ情動の緩和のために援助行動に結びつく場合もある(Eisenberg, Fabes, Schaffer, & Miller, 1989)。このように, 共感的関心と個人的苦痛は, 向社会的行動との関連の仕方が異なるため, 通常区別して扱われる(Batson, 1991)。子ども期の共感性と向社会的行動の発達過程に関する研究は数多く行われてきた(eg., Eisenberg & Fabes, 1998; Eisenberg & Miller, 1985; Hoffman, 2000)。それと比べて青年期以降を対象とした研究は少ないものの, 青年期において, 共感的関心は年齢が高いほど高く, 個人的苦痛は年齢が高いほど低いことが示されている(Davis & Franzoi, 1981; Wise & Cramer, 1988)。また, 共感性の感情的側面の欠如が攻撃行動やいじめにつながるという証拠も示されつつある(Gini, Albers, Bendt, & Altab, 2007; Lovett & Sheffield, 2007)。なお, 向社会的行

第65巻 第3号

のと考えられる。他者の感情に対する共鳴反応は相手との親密度によって異なることが明らかになっていることから (Beches, Coan, & Hasselmo, 2013), 筆者らは, 現在, 他者との親密度が道徳推論に及ぼす影響について検討を進めている。また, 自他の感情を認識・理解し扱う能力が, 社会生活においてどのような状況で現れ, どのような機能を持つのかについて, ストレスフルイベントへの対応等, 別の社会的状況を課題として用いてさらに詳細に検討していくことも, 今後の課題である。

引用文献

Batson, C. D. (1991). *The altruism question: Toward a social psychological answer*. Hillsdale, NJ: Erlbaum Associates.
Beches, L., Coan, J. A., & Hasselmo, K. (2013). Familiarity promotes the blurring of self and other in the neural representation of social cognitive and affective neuroscience, 8, 670-677. doi:10.1093/scan/nst046
Blair, R. J. R. (2013). The neurobiology of psychopathic traits in youths. *Nature Reviews Neuroscience, 14*, 786-799. doi:10.1038/nrn3577
Brasseur, S., Grégoire, J., Bourdu, R., & Mikolajczak, M. (2013). The Profile of Emotional Competence (PEC): Development and validation of a self-reported measure that fits dimensions of emotional competence theory. *PLoS ONE, 8*(5), e62635. doi:10.1371/journal.pone.0062635
Davis, M. H. (1980). A multidimensional approach to individual differences in empathy. *JSAS Catalog of Selected Documents in Psychology, 10*, 85-103.
Davis, M. H. (1983). Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology, 44*, 113-126. doi:10.1037/0022-3514.44.1.113
Davis, M. H., & Franzoi, S. L. (1991). Stability and change in adolescent self-consciousness and empathy. *Journal of Research in Personality, 25*, 70-87. doi:10.1016/0092-6566(91)90006-C
Eisenberg, Berg, N. (1979). Development of children's prosocial moral judgment. *Developmental Psychology, 15*, 128-137. doi:10.1037/0012-1649.15.

文献リスト

研究に使用した文献の一覧

※画面引用

溝川 藍, 子安 増生「青年期・成人期における共感性, 情動コンピテンスと道徳性の関連」
教育心理学研究, 65巻3号, 2017, p. 361-374
DOI : <https://doi.org/10.5926/jjep.65.361>

■学術論文とは

大学教員などの研究者が研究成果をまとめた論文です。最新の研究内容は、まず論文で発表されます。主に文系では、その後、本にまとめられることがあります。平均的な数量は数十ページと短いですが、最先端の研究が凝縮されています。

■論文誌と情報誌

学術論文は、学術雑誌に掲載されます。学術雑誌には、主に学術論文を掲載する学術論文誌と、初学者や一般の人向けに、注目の研究を紹介したり、勉強方法を案内したりする学術情報誌があります。上では学術論文誌を紹介していますが、まずは学術情報誌を読んでみてください。たとえば『こころの科学』『化学』『Newton』『経済セミナー』『法学教室』などが、図書館2階の雑誌コーナーにあります。

■トップジャーナル

国際的な学術論文誌は、掲載した論文が他の論文にどれだけ引用されただかによって、点数がつけられます。(Eインパクトファクター)。自然科学系は、有名な『Nature』『Science』を筆頭に、分子生物学の『Cell』や化学の『JACS』のメンバー

論文ができるまで



先行研究の調査とは、同じテーマで発表されている論文や本(=先行して行われている研究)を探すことです。これまでに分かっていることを確認し、研究の足掛かりをつかんだり、テーマを見直したりします。

文献調査は研究中も頻繁に行います。使った文献は、文献情報を控えておき、論文を書くときに文献リストを作成します。

普通の辞書では調べられない専門用語は、専門用語辞典を使用します。(文献データベースで他の研究者が使っている用語を調べる、という方法もあります)論文や抄録に使用するキーワードを同じ学問分野でよく使用される言葉にすると、論文を見つけてもらいやすくなります。

■ 査読 (peer review) とは

学術雑誌に投稿された論文は、同じ研究分野の研究者がチェックします。これを「査読(さどく)」といいます。トップジャーナルほど採択率が低く、査読も厳しくなります。

査読を経て掲載が認められると、雑誌の発行に先行してインターネットで公開されることもあります。ニュースで発表されるのもこのタイミングです。

学術雑誌には、査読がないものもあります。(一般的に、紀要には査読がありません。)一概に信頼度が低いとは言えませんが、留意しておく必要があります。

学術雑誌の種類



学会誌

「学会」が発行する雑誌。論文誌や学会ニュース誌、学会会議録(予稿集)が発行されます。

商業誌

出版社が発行する雑誌。国際的に有名な学術雑誌や、学術情報誌などがあります。

紀要

大学などの研究機関が所属する研究者の論文を集めて発行する論文誌です。

学術雑誌の探し方

読みたい学術論文が掲載されている雑誌や巻号が分かっているときは、雑誌名から電子ジャーナルと冊子体の雑誌を探します。

① 電子ジャーナル・電子書籍リスト



① 雑誌名を入力して検索し、タイトルをクリック



② 電子ジャーナルへのリンクが表示される

② 冊子体 (蔵書検索システム)

甲南大学 OPAC 蔵書検索システム	
雑誌情報詳細	内容
雑誌ID	SB00054300
区分/和洋	雑誌/和書
NII雑誌番号	AN00345837
ISSN	00215015
題名/著者	教育心理学研究 / 日本教育心理学協会編集
発行期間	1巻1号 (昭28.5)-
出版事項	東京: 国土社, 1953-
形態	冊: 26cm
蔵書情報	日本教育心理学協会 二ホン キョウウイク シンリカク キョウカイ <DA13054931>
蔵書情報	日本教育心理学協会 二ホン キョウウイク シンリカク キョウカイ <DA00475223>
所蔵館	雑誌部 和雑誌
請求記号	1-20, 25-60, 61(1-3)=1953-2013>

② 所蔵場所

① 甲南大学に所蔵がある巻号が表示

飛んでいる番号は欠号です。

発行されてから1~3年の雑誌は2階雑誌コーナーにあります。注記を確認してください。

雑誌館に所蔵されている雑誌は1階カウンターで利用申し込みを受け付けています。

各分野に点数の高いトップジャーナルがあります。とはいえ、国際的な学術論文は、内容も英語も難しいので、まずは先生や先輩から読み方を教わりましょう。『Nature Digest』や『日経サイエンス』など、日本語で要点を説明してくれたり、邦訳を掲載している雑誌を利用する方法もあります。また、分野によっては、論文誌以外に学会会議録(Proceedings)もよく使われます。

人文科学・社会科学系は、極端なランク付けはありませんが、やはり各分野に中心的な雑誌があります。自分の研究分野にどんな雑誌があるのか、一度調べてみてください。

一つ一つの「論文」も、ダウンロード数や被引用数、SNSの反応などによって評価(Ametrics: オルトメトリクスなど)されることがありますが、どの雑誌に掲載された論文でも、本当の価値がいつ、どのように開花するかは、読む人次第です。